

雲擎紅鏡扶桑日春嬌黃珠嬾柳風
私宅迎晴庭月暗陸池逐日水煙深
潭心月泣交枝挂岸口風來混葉蘋
つゆをやはらのいよをさうかふるをりしを
みよしをさうかふるをさうかふるを
まろ柳乃まゆめをさうかふるを
さうかふるをさうかふるを

花 甘落花

温克堂詩吟卷

花明上苑輕軒馳九陌之塵猿可
空山斜月瑩千巖之路
池色溶々藍染水花光焰々火燒春
遙見人家花便入不論貴賤與親疎
瑩日瑩風高低千顆萬顆之玉染枝
染浪表裏一入再入之紅

花の本心唯此

落花不語空辭樹 流水無心自入池
朝踏落花相伴出 暮隨飛鳥一時歸
春花面之闌入酣暢之筵 曉鶯聲之
豫參講誦之座

志の春心作花

落花狼藉風狂後 啼鳥龍鐘雨打時

離閣鳳翅馮舞下樓 娃袖顧階翻

さくら花ちるもあけ下風をささむりつと
そくくしとちりて空を飛ぶ花も
ささるもももれともものこはけこひあつと
志の春心むりあそびつとあそびます

躑躅

枯之新一成花

晚葉尚開紅躑躅 秋房初結白芙蓉
夜遊人欲尋來把 寒食家應折得薦

ねもよひいほるとはねもれこの空は
いそねハチ地をあそびますとあそびます

背壁燈殘經宿焰
開箱衣帶隔年香
生衣欲待家人著
宿讓當招邑老酣
いふ乃こゝろ海母雨多し
夜のねまれば
おほもろくうもあまもあ
あつち

首夏

雲中若風吟

甕頭竹葉經春熟
階底薔薇入夏開
苔生石面輕衣短
荷出池心小蓋疎

わづやうちりくさひや
とゆとあつち
あひさあもあつち
あつちあつち

夏夜

風吹枯木晴天雨
月照平沙夏夜霜
風生竹夜窓間卧
月照松時臺上行
空夜窓閑螢度後
深更軒白月明初

あひ乃あつち
あつちあつち
あつちあつち
あつちあつち

徳家采松在翁

あつても涼くやあつても涼く
ひよりし如きもいらかしの秋はも
夏の夜をともゆかりもすれとわさ
なぐく一ら清みあつるしの鬼

端午

随軒新白雲翁

有時當戸危身立無意故園任脚行
こころまともあつても涼く
わらふとくろくやままらるるありし
こゝろあつても涼く
なまあわつても涼く

竹亭陰合偏宜夏水檻風涼不待秋
あつても涼くあつても涼く
あつても涼くあつても涼く
あつても涼くあつても涼く
あつても涼くあつても涼く

花橘

知是房造足翁

廬橘子低山雨重拚桐葉戰水風涼
枝繫金鈴春雨後花薰紫麝飄風程

さしよまのたもつるもつるはあつらふて
むしりのもつれはあつらふて
あつらふてはあつらふて
あつらふてはあつらふて

蓮

風荷老葉蕭條綠水菱殘花寂寞紅
葉居影翻當砌月花開香散入簾風
煙閑翠扇清風曉水泛紅衣白露秋

暁日庵蓮台

岸竹枝低應鳥宿潭荷葉動是魚游
緣何更覓吳山曲便是我君座下花
經為題目佛為眼知汝花中植善根
あつらふてはあつらふて
あつらふてはあつらふて

郭公

春香園如於菟

一聲山鳥曙雲外萬點水螢秋草中

遲々号春日玉秋梵暖号温泉溢嬾々
号秋風山蟬鳴号宮樹紅

千岑鳥路含梅雨五月蟬聲送夏秋
鳥下綠蕪秦苑靜蟬鳴黃葉漢宮秋
今年異例腸先斷不是蟬悲客意悲
歲去歲來聽不變莫言秋後遂為空

秋後遂為空

たのしみ秋の夜のこころすあめあめ
しづかにあめあめあめあめあめあめ
あめあめあめあめあめあめあめあめ
あめあめあめあめあめあめあめあめ

扇

盛夏不消雪終年無盡風引秋生
手裡藏月入懷中

草草未一終

不期夜漏初分後唯翫春風未到前

八月十五夜 付月

月正印為山翁

秦甸之一千餘里凜冽冰鋪漢家
之世六宮澄之粉飾

織錦機中已辨相思之字擣衣砧
上俄添怨別之聲

三五夜中新月色二千里外故人心

嵩山表裏千重雪洛水高低兩顆珠
十二迴中無勝於此夕之好千萬里
外各爭於吾家之光

双雀庵冰壺翁

碧浪金波三五初秋風斗會似空虛
自疑荷葉凝霜早人道蘆花過雨餘
岸白還迷松上鶴潭融可鱉藻中魚

志しつこせめをねんねんちりりしつあつと此
かよとちへみねるあまののうれ月
よふののれとをねおもふういふたは
月つりいしりひありあういしむ

九日付菊

枕郷男李郷翁

驚知社日辭巢去菊為重陽冒雨閑
採故事於漢武則赤萸插宮人之衣
尋舊跡於魏文亦黃花助鼓祖之術

先三遲号吹其花如曉星之轉河漢
引十分号瀉其彩疑秋霜之迴洛川
谷水洗花汲下流而得上壽者世餘
家地脉和味冷日精駐年顏者五百箇歲
わつやもねさきくれしつあつと此
しつあつと此

菊

白蓮舎恭長翁

霜蓬老鬢質三兮白露菊新花一半
不是花中偏愛菊此花開後更無花
嵐陰欲暮契松栢之後凋秋景早移
嘲芝蘭之先敗

子草為孤栢花

鄜縣村閣皆潤屋陶家兒子不垂堂
蘭苑自慙為俗骨槿離不信有長生

蘭蕙苑嵐推然後蓬萊洞月照霜中
ひらがさゆきまのふりあめりるこさへ
あまのちりしとそあまされある
あつ海あつしつらつとあつしつらつ
とあまのちりしとそあまされある

菊古墨見舟翁

九月盡

綴以堵函為固難留蕭瑟於雲衢
綴令孟賁而追何遮夾籟於風境

うらなひ心さふれし秋も死を
おとらひしつらきもゆゑありあ
娘の命もさしたのあしきものありま
座のまあるひつらき

蘭

花の本心唯花

前頭更有蕭條物老菊衰蘭三四叢
扶桑豈無影乎浮雲掩而忽昏叢蘭
豈不芳乎秋風吹而先敗

凝如漢女顏施粉滴似教人眼泣珠
曲驚楚客秋猿韻夢斷燕姬曉枕重
如し心も無つたにちひしげ腕のゆま
あり無きあしけしあもさうりも

槿

花の心本心唯花

松樹千年終是朽槿花一日自為榮
来而不留薤露有拂農之露去而

稚蘓徃反杖穿朱賞臣之衣陸逸
遊履踏葛稚仙之藥

道源氏之七卷

隨嵐落葉含蕭瑟濺石飛泉弄雅琴

逐夜光多吳苑月每朝聲少漢林風

いよりのいよみをよみあはるるのほろりき
やふれあはるるをよみあはるるのほろりき
かたふ月をよみあはるるのほろりき
さるるのほろりきをよみあはるるのほろりき

見何人
萬里入南去三春鴈北飛不知何
鴈 村歸鴈

歲月得與汝同歸

招下卷一函卷

尋陽江色潮添滿彭蠡秋聲鴈引來
四五朶山粧雨色兩三行鴈點雲聲

虛弓難避未拋疑於上弦之月懸

奔箭易迷猶成誤於下流之水急

鷹飛碧落書青紙隼擊霜林破錦機

碧玉粧箏斜立柱青苔色紙數行書

雲衣范寂羈中贈風櫓蕭湘浪上舟

金風... 蕭湘浪上舟

鷲毛為月為花

歸鴈

山腰歸鴈斜牽帶水面新虹未展巾

山腰歸鴈斜牽帶水面新虹未展巾

虫

切之暗窓下啜之深草裏秋天思

婦心雨夜幽人耳

紫花園月為花

可憐九月初三夜露似真珠月似弓
露滴蘭蓑寒玉白風衝松葉雅琴清
さしけりこれあさあめりあまのこころを
あめりあまのこころをあめりあまのこころを

霧

現在庵露心霧

竹霧曉籠衙嶺月頻風暗送過江春
雖愁夕霧埋人枕猶愛朝雲出馬鞍

しんあさあめりあまのこころをあめりあまのこころを
あめりあまのこころをあめりあまのこころを
あめりあまのこころをあめりあまのこころを
あめりあまのこころをあめりあまのこころを

擣衣

猶小路

八月九月正長夜千聲萬聲無了時
北斗星前橫旅雁南樓月下擣寒衣
擣處曉愁圍月冷裁將秋寄塞雲寒

裁出還迷長短製邊愁定不首腰圍
風底香飛雙袖攀月前拚怨兩眉低
辛之別思驚秋鷹夜之幽聲到曉鷄
如之之海毛之之之之之之之之之之
之之之之之之之之之之之之之之之之

冬

初冬

一日庵竹二翁

十月江南天氣好可憐冬景似春花
誰家思婦秋擣帛月苦風凄砧杵悲
四時零落三分減萬物詭詭過半凋
床上卷收青竹簟匣中闌出白綿衣
神其自之之之之之之之之之之之之
之之之之之之之之之之之之之之之
冬夜

一盞寒燈雲外夜
數盃溫酎雪中春
年光自向燈前盡
客思唯從枕上生
たをいへるあつちりちゆげそふの巻は
りりかやといしむいちもつらあけくちのり

歲暮

小築為春湖翁

寒流帶月澄如鏡
夕吹和霜利似刀
風雲易向人前暮
歲月難從老底還

たをいへるあつちりちゆげそふの巻は
りりかやといしむいちもつらあけくちのり

爐火

夜半庵令陸翁

黃醅綠醑迎冬熟
絳帳紅爐逐夜閑
看無野馬聽無鶯
臘裏風光被火迎
此火應鑽花樹取
對來終日有春情
多時撥醉鶯花下
近日那離獸炭邊

氷封水面無浪雪點林頭見有花
霜妨鶴淚寒無露水結孤疑薄有冰
おんをそくし月のかかりけりおのじり雪は
かげりし水我まの山雪とてかたむる

春氷

源 小 路 翁

氷銷見水多於地雪霰齊望山盡入樓
氷消漢主應疑霸雪盡梁王不召牧

胡塞誰能全使節潭沱還恐失臣忠

あつちのこまゆりてさしはかきけり雪月
あつちのこまゆりてさしはかきけり雪月

散

麋牙采斲聲脆龍領珠投顆寒

みやうめまのあつちのこまゆりてさしはかき
まのあつちのこまゆりてさしはかき

佛名

香村氏書泉翁

